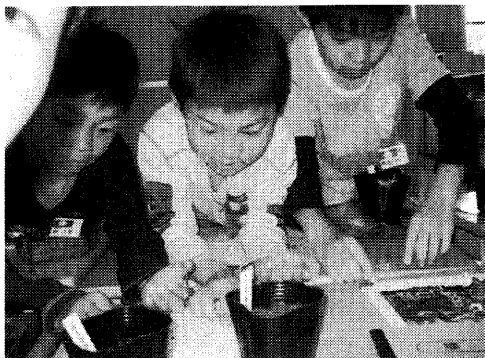


「意味と内容」がひろがる学びの創造

— 互いのまなざしが共鳴することによって —



0. はじめに

社会の変化とともに、子どもたちや学校を取り巻く環境が大きく変わってきている。学校では、それまでの教育内容を精選し、学校週5日制と教科の枠をこえた学習を可能にした総合的な学習が始まった。にもかかわらず、相反する考え方として「学力低下」の問題がすぐにでてきたのである。今、学校は、いわゆる読み・書き・計算を中心とした基礎的・基本的な学力の定着を優先的に考えている。それは、「ゆとり教育」が始まってすぐの大きな変化ではないだろうか。基礎的・基本的な力の定着を一つの柱としながら、子どもたちが、学ぶことそのものに魅力を感じ、自ら考え・活動していくことがねらいの一つとして教育改革がなされたはずであった。このような中、本校では、子どもたちの学びとはいかなるものかを最優先に考え、その子が学ぶ目的をもち、学ぶ喜びを味わうことをめざし実践・研究してきている。

研究主題「「意味と内容」がひろがる学びの創造」のもと、本年度は2年次の実践研究となる。

わたしたちは、子どもたちが、今おこなっている学習を自分自身のものだと感じ、学習対象に価値を見出し、こだわりをもって取り組んでいける学習を構築しようと研究を進めてきている。学習において、その子自身が主体となって「意味と内容」をひろげていく学びの可能性がそこにはある。その実現のために、昨年度は、指導者である私たちが子どもの「まなざしを共有」していくことから始めた。

今年度は、学習の中で子ども同士が響きあうことをめざし、サブテーマを『互いのまなざしが共鳴することによって』とした。

学習とは、基本的には個人でおこなうものである。しかし、学校で学習する意義は、それだけには留まらない。子どもは一人一人固有の価値観をもっており、それぞれの個性や人間性として形成されている。その子の背景（育った環境や日頃の生活）に大きな関係があると言えるだろう。もし、その子が自分一人で学習しているだけなら、それぞれの価値観がより一層固定化されてしまう。ところが、学校では、その子は授業の中で自分とは違う考え方に出会ったり、活動の仕方に接したりできる。そして、自分自身の考え方や活動の仕方と比較し、自分自身の変容へつなげていったり、自分の考え方や活動の仕方を確かなものにしていったりしていくことで、子ども同士が刺激しあい、質の高い共感や共生、協働が生まれてくると考えている。

1. 研究主題について

(1) 「意味と内容」がひろがる学びとは

「意味と内容」をひろげるのはだれなのか？子どもたちである。しかし、それは私たち教師であるとも言える。

子どもたちが学習していく対象は、もともと「意味」が内在しており、それに近づけるために「内容」がある。私たちは、それにはどんな「意味」があり「内容」を用意できるのかを見極め、精選した上で、教材化している。また、教材化するときには、子どもたちの学習予測をたて、どんな力がついていくのかも考えている。一方、子どもたちは学習そのものを楽しみ、しっかり考えたり、活動したりしようとする。それは、教材の「意味」にふれようとしていると言ってよいのだが、子どもたちの学びはそれだけに留まらない。彼らは、その学習をしっかりと取り組んだり、他の子の学習の様子にふれたりすることで、私たちが考えた教材の「意味と内容」をよりひろげようとしていくのである。

このことを、体育科を例にとり説明していくことにする。

体育科における「意味と内容」をひろげる学びとは ～ 「バレーボール5年」から ～
《「意味と内容」とは》

バレーボールは、相手チームと勝敗を競い合うことを楽しむ運動であり、「意味」となる。これは、バレーボールだけでなく、ボール運動全般の「意味」となっている。だから、単元計画も勝敗の競い合いが高まっていくように「ルールやゲームの仕方、チームのメンバーに慣れる」(ステージ1)⇒「相手チームを決め、相手に合わせた戦術などを考える」(ステージ2)としているのである。それにともない、「内容」は技能を高めたり、チーム力を高めたり、チームの人間関係をより良くしたりということになる。また、自分たちに合ったゲームにしていくために、ルールを変更していくことも「内容」となってくる。

《「意味と内容」がひろがる学びとは》

「バレーボール」でも他のボール運動同様の単元構成をしていっても、子どもたちは「意味」は違ったものになってくる。相手チームと勝ち負けを競い合うことよりも、相手チームとラリーを続けることが楽しいと感じるようになるからである。それは、ネット型特有の楽しみ方と言えるのである。子どもたちは「競争」から「ラリー」へと彼らの「意味」をひろげていくのである。だから、単元当初は一人がきつく打って喜んでいますが、それを手控えるようになってくる。遠慮するとか、力いっぱいできないということではなく、簡単にきまって得点していくことでまわりの子が楽しくなくなるのがわかるからだである。だから、彼らの練習の様子は、パスの練習が多くなるのである。

各教科とも独自の「意味」があるし、学習対象にも「意味」がある。学習者である子どもたちが、それを感じ、つかみとろうとしていくなかで、深化していったりひろがっていったりしていく。また、新しい「意味」を感じ、学びへの意欲になっていくときもある。子どもたちが教材の「意味」を学ぼうと学習・活動していくと、真剣味が増したり、考え方が深まったり、身近な社会への配慮ができてきたりする。そして、教材をこえた「意味」にふれていったり、新たな学習がうまれたり、深まった学習になっていったりしていくのではないかと私たちは考えているのである。(教科の「意味」は教科提案をみてください。)

(2)互いのまなざしが共鳴するとは

“まなざし”とは、子どもの表情であり、内面の表れである。また、学習の方向性であり、学習へ向かう強さでもある。私たちが、それによりそい、みとることによって、子どもはより素直に自分の思いや考えを表出していく。私たちは、子どもたちの学びがより良いものになっていくように、その子のまなざしを共有していかなければならないのである。これは、昨年度のサブテーマであり、私たちがその子の“まなざし”によりそい、しっかりみとることを「まなざしの共有」と定義して、特に研究の重点として取り組んでいった経緯がある。

そして今年度、「互いのまなざしが共鳴することによって」というサブテーマを設けた。学級は、教師と子どもの関係だけで成り立っているものではない。私たちがその子のまなざしを共有していくように、子どもたち同士も互いに知ろうとするし、認めあったり、励ましあったり、触発されたりする関係になっていく。単に集団をつくっているというだけでなく、その中で共感や共生、協働がうまれてくるのである。「そういう見方もあるのか。」、「そういう考え方があるのか。」、「そういう行い方もあるのか。」など、さまざまな考え方や活動の仕方を発見できるのである。それは、その子を知る・認めるということであり、その子にとって、まわりの子に認められているという安心感や自信につながるだろう。その上にたって、自分と他の子の考え方や活動の比較をし、参考にしたり、自分への確かな自信にしたりしていく。また、お互いの考え方や活動の仕方を磨き合い、より良くしていくことが、「共鳴」していくことなのである。

子ども同士が互いに「共鳴」しあう姿とは次のようになる。

《互いのまなざしが共鳴している姿》

仲間の発言や考え方、活動の仕方に触発され、共感し、自分の変容や、なんらかの学習の足跡を実感できたり、自分やまわりの子により良い影響をあたえたことを感じられたりすること。

これは本校でめざしている、まなざしが「共鳴」している姿である。互いがより良く影響しあい、自分やまわりの子・集団の変容が自覚できることが、その子の身近な社会をかえていくことにつながっている。しかし、その姿になるためには、学級風土や個人に必要な要因がいくつかあ

る。それを次に提示することにする。

《互いのまなざしが「共鳴」するための要因》

『学級風土』より

- 子ども同士が互いに認めあえる雰囲気
- 間違いを言いあえる雰囲気

『個人的な資質』より

- 仲間や先生の言うことをしっかり聞く態度
- 自分の発表に理由を言ったり、仲間の意見に絡めて発表できたりする力
- 自分の考えと、友達の考えを比較する力
- 仲間の考えの良さを見出そうとしたり、自分にかしたりする向上心
- 人や人間関係でなく、意見の内容できちんと判断する公平・公正な判断力と態度

2 単元構成の大切さ

(1)単元構成とは

私たちは、子ども同士がお互いのまなざしを共鳴させながら楽しく・真剣に学習していくことをめざし、それにせまるために単元構成を大切にしている。単元構成とは、学習対象がもつ価値に子どもたちが近づいていく道順のようなものである。それは教師が一方的に決めるものではないし、子どもたちだけで決めるものでもない。私たちの役割は、子どもたちが学習へ向かう進み方の予測をたてることと、その道順のモデルをいくつか用意していくことが中心となってくる。すなわち、私たちは、学習対象のもつ価値と子どもの学習とのすりあわせをしていくことで、子どもたちの教材として調理し直す「教材研究」をしっかり行うことを大切にしている。また、私たちが価値を決め、一方的にそれに子どもたちを従わすことをせず、その子の進む道順の予測をしようとするれば、その子をありのままにとらえる「みとり」も大切になってくる。つまり、本校でいう「単元構成」とは、「教材研究」と「子どものみとり」をさしているのであり、それらは分離独立しているのではなく、お互いに大きな関わりがある。

(2)教材研究の充実

私たちが単元構成を大切にしているのは前述の通りで、まず大切にしているのは「教材研究」である。

「教材研究」とは、学習対象がもっている価値を明らかにしていく作業である。私たちは、まず、その教材で子どもたちが何を学習していくのか学習の可能性を考える。そして、子どもたちにとってどんな学習成果が期待できるのかも考える。それに加え、子どもがこの教材でどんな学習の仕方をしていくのか予測をたてるのである。ここで最も言いたいことは、私たちは教材に子

どもたちを近付けさせるために教材研究をしていくのではなく、子どもたちと教材とをより良く出会わせ、教材の価値をしっかりと味わわせるためにおこなっているのである。つまり、教科や教材のねらいだけでなく、子どもから見た教材のとらえや子どもの学習ということをはっきり考えることである。

(3)子どものみとりをいかす

子どもがその教材でどんな学習をしていくのか予測をたてようとする時、「子どものみとり」が重要になってくる。私たちは、その子の学習にまつわる諸条件である“経験”、“発達段階”、“かくとくしている力”などをみとるだけでなく、その子の固有の価値観やそれをつくりだした背景、性格、その子自身の問題までをみとる努力をしている。つまり、その子をありのままにみとることをしているのであって、その子を見とるための手立てとして、学校全体としては、日記や作文など書いたものの利用と、朝の会でのその子の発言に注目することである。

また、その子をしっかりとみとることによって、単元構成の計画段階でいかされるし、単元の途中でも、内容を変更したり、活動がかわってきたりするだろう。それは、まさに、子どもによりそった単元といえる。具体的には、数人の子を「着目児」として、単元を通してその子のありようや変容をみとっていったり、本時の中でその子の“出”や“思考”に注目していったりしている。

3 本校の評価

(1)単元評価 「追求」から「追究」へ

私たちは、その子によりそった単元構成を計画・実践していったときに「単元・授業評価」も大切にしていかなければならない。そこで、子どもの学習の姿の変容を、「追求」から「追究」へという指標を設け追っていくことにした。

追求…その子が、興味・関心に基づいてその子なりに取り組んでいる姿

追究…学習対象に価値を見出し、こだわりをもって取り組んでいる姿

私たちは、まず、子どもたちが、興味・関心に根ざした活動を大事にすることから始めている。それは、ただ喜ぶだけの活動を計画することでない。子どもの興味・関心の向いている方向をしっかり把握したいからである。そして、そこから進んでいく学習に「意味」があり、「内容」が豊富であれば、子どもたちはそれに打ち込んでいく。つまり、真剣な学び合いがうまれてくるのである。私たちは、子ども個々人が、学んでいくことにこだわりをもった真剣な学習を展開したいのであり、こだわりをもった者同士の質の高いかわり合いをめざしている。だから、子ども

たちの学習の姿の変容で、「単元評価」をしている。

(2)個人評価 その子の問題と私たちの願い

私たちは、子ども一人一人をみとることで、その子のありのままをとらえ、単元構成にいかすことを考えている。しかしそれだけではない。その子を見とることで、その子もっている問題がしっかりつかめていく。その子の問題が明らかになると、私たちは、その子に対して願いをもつようになる。(ここで言うその子の問題とは、その子の教室での位置であったり、対象のとらえ方であったり、ものの考え方であったりする。また、人との関わり方であるときもある。) 私たちがおこなっている日々の実践は、その子にとって意味のあるものでなくてはならない。そういう意味で、その子の問題をはっきりつかみ、その子に願いをもつことによって、その子の成長へとつながることを期待している。

だから、私たちがおこなっている研究は、その子に力がついたかどうかということを規準に考えていない。彼らが、人として成長でき、よりよいアイデンティティーを確立していくことをねらっている。つまり、その子にとって、生涯にわたり自分をのばし、成長していける基礎的な資質や力をつけてほしいと願っている。そのために、本校では、個人評価を大切にしている。